

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號一第 卷(十四第)

月一年四十和昭

經濟論叢 每月一日發行
第四十八卷第一號 昭和十四年一月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

(禁轉載)

目次

作田莊一博士肖像……………	卷頭
作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……………	一
日本的學問の文化史的意義及び基本的諸典型……………	文學博士 米田庄太郎……………三
東亞民族の形成……………	文學博士 高田保馬……………六
日本經濟史研究の發展……………	經濟學博士 本庄榮治郎……………五
理論學としての日本經濟學……………	經濟學博士 谷口吉彦……………七
産業組合の耕地管理……………	經濟學博士 八木芳之助……………九
印度に於ける國民的産業能率の遲滯性に就て……………	經濟學士 大塚一朗……………一〇
「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……………	經濟學士 中川與之助……………一三

資本主義と支那事變……………經濟學士 柴田敬…一四二

明治時代農村手工業の消長……………經濟學士 堀江保藏…一五三

我國に於ける預金通貨統計の發達……………經濟學士 中谷實…一六六

保險思想の發展……………經濟學士 佐波宣平…一五九

歴史學派に於ける國民經濟の概念……………經濟學士 白杉庄一郎…一三二

日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……………經濟學博士 石川興二…一三七

國事資金法の提案……………經濟學博士 小島昌太郎…一四九

農山漁村財政の五箇年記録……………經濟學博士 汐見三郎…一五九

支那の社會成層……………法學博士 財部靜治…一六八

資本主義と支那事變

柴田敬

一序

支那事變の意義は何であるか、と言ふ問題は、色々の觀點から之を提出し得る筈のものであり、又現に色々の觀點からの答へが試みられてゐるのである。何しろ世界史の根本的變革を齎らすほどの大事變である筈であるから、これから後も、此の問題に就いて色々の觀點から色々な答へが提出される事であらう。本稿に於いて私は、此の問題を専ら資本主義との關聯の觀點から採り上げ、それに就いての卑見を述べようと思ふのである。

言ふまでもなく、歴史的實在の意義は、定まつて定まらざるものである。けだし其の實在が其處に在る限りに於いては其の實在の意味するところは規定されてゐるわけであるが、其の實在の意味するところは更に、その後如何なる歴史的實在が繼起するかに依つても、従つてその後如何なる歴史的實在が繼起せしめられるかに依つても、影響を受けるものであるから。此の意味に於いて、歴史的實在の意義の規定は、實踐的立場からするに非ざれば行はれ得ざるものである。此の歴史的實在の意義の實踐的規定は、勿論、學徒個々人の恣意的なる主觀的實踐的立場からは、斯かる立場が自己實現力を持たざるものである以上、所詮不可能である。従つて、歴史的實在の意義の實踐的規定はどうしても歴史的實在其のものゝ中に内在し生動せる力の客觀的實踐的立場から

なされねばならない。而も此の歴史的實在其のもの、中に内在し生動せる力の客觀的實踐的立場に立つと言ふ事は、學徒自身の主觀的實踐的立場が充分にそれを含み得るものとなつて居らねば、學徒にとつては不可能である。此の點に歴史科學の特殊の困難が存するわけであり、又此の點に歴史科學の特殊の使命が存するわけである。此の點は、當面の問題の考察に際しても、否當面の問題の考察に際しては特に切實に、反省を要するのである。けだし社會科學は近年愈々其の權威を失つて來てゐるのであるから。

本稿に於いて考察せんとする問題が私の能力を遙かに超絶せるものである事を、私は自らよく知つてゐるのである。にもかゝらず敢えて此の問題を此處に採り上げるのは、一つには勿論此の問題が經濟學徒の當面せる最も重大なる問題であるからであるが、今一つには本號がほかならぬ恩師作田莊一教授の御還曆紀念號であるからである。教授こそは斯うした問題に對して學問的に最も權威ある解答を與へ來りし人であり、又現に與へ續くる人である。其の教授の御薫陶を、而も教授の人格的學問的影響力烈々として肺腑を突くが如くなりし若き日より今日まで、約二十年の長きに亙つて引きつゞき受けながら、つひに其の似姿らしきものをすらうつし得ず徒らに恩師の學問の威大さにますく驚倒させられるばかりなる私は、こゝに、恩師の御還曆に際し、餘りにも不肖なる自分を御詫びし度いのである。

一 資本主義沒落論

昭和六年の春から昭和八年の春にかけて、即ち、世界恐慌の猛威凄慘を極めし只中に於いて、私は、恐慌の停

止を齎らす如き事情の成熟せる事を、色々の機會に發表して置いたのである¹⁾。此の判斷は、世界經濟の其の後の經過に依つて、大體に於いて實證されたと言ひ得るかのやうであるが、私が斯かる判斷に達したのは、當時詳論せし如く、次の如く考へたからであつた。

一八五〇年以來八十幾年に亙つて、年々の世界的商品取引總額（金物價に従れる）の指數と世界的貨幣用金存在額の指數とを求め、前者を後者で除して見ると、我々は次の如き事實を發見するのである。即ち、一八五〇年から一九一四年までの六十幾年の長きに亙つて、斯くの如くして得られる所の年々の商を曆年の順に従つて列べて見ると、七八年乃至十一年を一期とする所の波動を其處に見るのであるが、此の波動を他にしては、言ふに足るほどの變化を見ない。若し何等かの變化ありと言ひ得るとするならば、極く緩慢なる遞減の趨勢である。然るに、元來、商品取引總額を貨幣用金存在額で除して得られる所の商は、貨幣數量説の論議に際してよく引合ひに出される所の彼の所謂交換方程式に據つて瞭かなる如く、貨幣用金の名目的流通速度をあらはす筈である。従つて、一八五〇年から一九一四年までの六十幾年に關して我々が右に發見した所の事柄は、其の長い年月に亙つて貨幣用金の名目的流通速度が大體に於いて變化しなかつた事を、而して若しその變化があつたと言ひ得るとするならば寧ろ極く緩慢なる低下を見てゐると言ふ事を、意味する。然るに、一八五〇年から一九一四年までの六十幾年は、世界經濟が事實上大體に於いて金本位制度の下にあつた時代であつた。従つて我々は右の事實から、金本位制度の下に於いては世界的貨幣用金の名目的流通速度は大體に於いて不變なる正常値を事實上持つてゐるのではないかとの感を持つに至つたのである。

1) 拙稿「依然たる物價低落」(經營と經濟)昭和六年八月號。
拙稿「長期景氣波動と世界恐慌」(經濟論叢)昭和七年三月號。
拙稿「An Examination of Professor Cassel's Quantity Theory of Money」
(Kyoto University Economic Review) July, 1932.
拙著「理論經濟學下」昭和十一年三月。

然るに一九一五年以後は、世界的貨幣用金の名目的流通速度の指數は、それまでとは全く異つて、一九一八年には正常値の約二倍になり、一九二一年には急轉直下して正常値に少々接近してゐるが其の次の年から再び上昇し、一九二五年には正常値の一・七倍見當に達し、それを頂點として其後は下向の一路を辿り、はじめは緩慢に下りながらやがて急落に轉じ、一九三一年には既に正常値を割つてゐるのである。

世界的貨幣用金の名目的流通速度の指數の此の異變を、私は次の如くに説明したのである。「一九一三年乃至二〇年迄の間に（世界的貨幣用金の名目的流通速度の指數が異常の上昇を見たのは、當時諸國の貨幣が金との結び付きを絶たれた爲に）……貨幣と金とが結びつけられる事によつて存在してゐた所の金の需要事情が變化される事によつて、金そのものゝ價値が動いた事に因る」²⁾「従つて、世界的貨幣用金の名目的流通速度は）、アメリカによつて金本位への決定的一步が踏み出されると共に急激に收縮して正常的大さに餘程近づき、其後、世界各國が未だ金本位制に歸り得ずして行き迷へる時代に再び増大し、世界各國が愈々金本位に復歸する事に決定した頃から又々收縮を始めてゐる。此の事は、（世界的貨幣用金の名目的流通速度に關する）曩の經驗法則がしかく容易に改變され得ない事を示すものではなからうか」³⁾。

實に斯くの如き見方から、私は次の如く論じたのである。「世界恐慌は、根本的には、實に、此の經驗的法則の強行的貫徹に由る。……本稿の研究は……勿論極めて不完全なるものであ（るが）……若しそれが大過無きものであるならば、世界恐慌がどこまで續くかと言ふ事に就いて、長期景氣變動論の視角からの一瞥を試みる事が出来るであらう。（惟うに一九三一年まで、既に、世界的貨幣用金の名目的流通速度は、その正常的大

2) 拙稿「長期景氣波動と世界恐慌」前掲、111—112頁。

3) 前掲拙稿、117頁。

いさに餘程接近したはずであり、或は寧ろ正常的大いさ以下になつたかも知れない。……して見れば物價低落を強ひつゝある根本的事情は取り去られたはずである。乍然、それだけの理由で直ちに、物價低落は停止すると考へるならば、勿論、誤謬に陥らざるを得ない。……變動の隨性の作用のある事を看過する事は出来ない。今後の問題に關して最も重要な意義を有するものゝ一つは、各國の金本位停止及び平價切下である。若し世界の主要國が平價切下を斷行するならば、(世界的貨幣用金の名目的流通速度をそれだけ引下げる事になり)、……それだけ物價低落の喰止又は反動高への根本的事情を備へる事になるであらう。」⁴⁾

右の如き卑見を發表した翌年の春にはアメリカが金本位を停止し徹底的なる事實上の平價切下を斷行し、一九三六年秋にはフランスを中心とする金ブロックの崩壊を見た。而して世界經濟の彼の大恐慌は大體に於いて一九三二年に底をつき、爾後極めて緩慢なる好轉を見つゝ、一九三六年頃から稍々好景氣らしき現象を呈するに至つたのである。従つて、一八五〇年乃至一九一四年の間に於ける經驗から割り出されたる世界的貨幣用金の金本位制下に於ける名目的流通速度を根據とする我々の豫測は、大體に於いて適中したるかの如くである。けれども實は必ずしもさうは言ひ得ないのであつて、世界經濟の最近の動向は、大戰前の經驗から割り出されたる右の如き經驗法則を根據として豫測を行ふ事の危険を、換言すれば大戰後の世界經濟が大戰前のそれに比して構造的に變化せる事を、如實に物語るものゝ如く見えるのである。

此の事は世界的貨幣用金の名目的流通速度に於ける其の投影を見るだけでもわかるのであつて、それは次表⁵⁾の如くなつてゐる。

4) 前掲拙稿、117—119頁。

5) これは備考に於いて述べる如く國際聯盟の「世界の原産物の一般生産指數」を計算の基礎としてゐる。今同じ本の123頁に掲げられる所の「世界の工礦産物の年生産指數」に據り、それを私の曩の研究(例へば前掲拙稿)と連結する爲に1925—1929年の年平均指數が私の曩の研究に於けるそれと同様に124.54とな

年次	生産指数	紙幣物價指数	金價格指数	金物價指数	生産物總價格指数	貨幣川金指	貨幣川金數	名目流通速度
1929	132.0	134.4	100.0	134.4	177.4	2,336	147.94	119.9
1930	130.8	113.2	100.1	113.1	147.9	2,391	151.42	97.7
1931	125.8	97.8	108.9	89.8	113.0	2,449	155.10	73.2
1932	120.8	95.0	139.1	68.3	82.5	2,513	159.15	51.8
1933	125.8	93.8	146.1	64.2	80.8	5,580	163.39	49.5
1934	128.3	96.4	162.1	59.5	76.3	2,652	167.95	45.4
1935	130.8	99.6	167.3	59.5	77.8	2,732	173.02	45.0
1936	137.0	104.6	165.2	63.7	87.3	2,821	178.66	48.9
1937	144.5	121.0	165.8	73.0	105.5	2,916	184.67	57.1

備考 生産指数は League of Nations:

World Production and Prices, 1927—38, p. 110 に掲げられる世界の原産物の一般生産指数に 1,245.4 を乗じたものである。斯かる数に乗じたのは、右の國際聯盟の指数が一九二五—一九二九年の年平均を 100 とするものに、私の曩の研究に於てはそれが 124.54 となつてゐるからである。私のこれまでの算出法に従はずに

國際聯盟の指数に従ふのは、後者の方がより合理的なものであるからであり、工産物の一般生産指数に従はずに原産物のそれに従ふのも、後者の算出法の方が前者のそれよりもより合理的だからである。

紙幣物價指数は英國ステイタストの卸賣物價指数に、その一九一三年の數値を 100 とす如き數に乗じたもの。斯かる數に乗じたのは、私の曩の研究との結びつきを可能にする爲である。

金價格指数は、League of Nations: Statistical Year-Book, 1937—38, p. 167 に掲げられる英貨で言ひ現はされたる金の平均價格に據り、一九二九年のそれを 100 として割り出す。

金物價指数は、紙幣物價指數を金價格指數にて除したるもの。
生産物總價格指數は生産指數に金物價指數を乗じたるもの。

貨幣用金現在高は、一九二九年の數値は Kitchin, J.: The Supply of Gold compared with the Prices of Commodities に掲げられるもの、その以後のものは、當該年の世界の金産額に 0.6374 を乗じたるものを當該年に於ける世界的貨幣用金増加量と

るやうに、それに 1.3878 を乗ずると、生産指數の欄は次の如くなる。138.78, 122.68, 109.77, 95.76, 107.83, 117.96, 132.81, 152.24, 164.32; 従つて生産物總價格指數は: 186.52, 138.75, 98.57, 65.40, 69.23, 70.19, 79.02, 96.98, 1. 19.95; 名目的流通速度は: 126.1, 91.6, 63.6, 41.1, 42.4, 41.8, 45.7, 54.3, 65.0 となる。

看做しつゝ算出、0.6374と言ふ數値は、一九二六—二九年の世界の金産總額と同期間に於ける世界的貨幣用金増加量(右の Kitchin の計算に據る)との比較に依つて得られたるもの。金産額は前掲國際聯盟統計年觀一五七頁に據る。

貨幣用金指數は一九一三年の世界の貨幣用金現在高(右の *Mint* の計算に據る)を100として算出。一九一三年を基準年とするのは、私の囊の研究との結びつきを可能にする爲である。

名目的流通速度の指數は、生産物總價格指數を貨幣用金指數にて除したるもの。

一八五〇年から一九一四年までの間の經驗を基礎として我々が到達した所の金本位制度の下に於ける世界的貨幣用金の名目的流通速度の指數は、一九一三年を基準年として之を見れば、大體八〇見當である。従つて、世界的貨幣用金の名目的流通速度の指數が一九三五年に於いて四五になつたと言ふ事は、それが其の正常値の五六パーセントに低下した事を意味するのであり、又、一九三七年に於いて五七・一を示すと言ふ事は、それが其の正常値の七一パーセントの所に依然として低迷してゐる事を意味する。従つて、大戰前の經驗から割り出されたる世界的貨幣用金の名目的流通速度に關する經驗法則が若し今日に於いても比較的有力に作用してゐるとするならば、世界的貨幣用金の名目的流通速度が斯くの如く低下する筈はないのであり、假りに其の低下が異常なる高位より正常の高さへの急落の墮性として説明し得られるとしても、世界的貨幣用金の名目的流通速度が斯かる低位に比較的長い間低迷する筈はないし、殊に世界的貨幣用金の名目的流通速度が其の正常値よりもまだ遙か下にあるのに一九三七年に既に景氣上昇が停止して不景氣に轉落すると言ふやうな事はない筈である。

大戰後の世界經濟の構造變化に關しては、我々は右のものよりも更に端的なる表現を與へられてゐるのである。それは、その量に於いてもその持続性に於いても大戰前と全然其の姿を異にしたる失業である。資本主義的

景氣は一九三二年を大體底として緩慢なる好轉の路を辿り殊に一九三六年頃からはそれが愈々顯著となつたのであるが、景氣が如何に立直つても所謂資本主義國は今日依然として大戰前の恐慌時も及ばぬ失業を擁してゐる。

大戰後の世界經濟の構造變化の基本的なるものとしては、我々は何よりも先づ、戰時及び戰後の世界經濟の混亂に依つて拍車をかけられた所の資本主義の獨占資本主義化を掲げねばならぬ。元來資本主義の下に必然的に生ずる所の固定資本の増大は、周知の如く、企業を集中を、従つて資本主義の獨占資本主義化を、必然的に結果するものである。然るに、大戰中に急場の必要に迫られて各國が採用した所の經濟統制は、結果に於いては各國の資本主義の獨占資本主義化の傾向に斷然拍車を加へる事になつたのであり、又、戰時乃至戰後に異常に膨脹せる世界的貨幣用金の名目的流通速度の戰後に於ける收縮過程も亦、合理化運動や各國の經濟的封鎖政策やを誘發する事に依つて、各國の資本主義の獨占資本主義化の傾向を刺戟し續けたのである。

然るに完全に或は不完全に獨占化したる企業乃至企業結合は、或は直接的に、或は價格指令を通じて間接的に生産を制限して（廣義の）獨占利潤を獲得し、乃至は、損失を他に轉嫁しようとするのが常である——勿論例外が無いわけではない——が、其の事は、一方では當該産業に於ける資本投下の制限を意味し、他方では社會的利潤中のますます大なる部分を斯くして引き去る事に依つて其他の産業の興り得る利潤をますます僅少にしそれ等の産業の利潤率を低下し、⁶⁾ 其等の産業への投資をも壓迫する。而も此の事は國民所得をそれだけ少くするわけであるから、それだけ又獨占産業に於ける投資をも壓迫する。資本主義の發展段階に於いては、不況が続けば金融機關の準備率が次第に大きくなりやがて金利が引下げられ銀行の貸付利率が事業界の利益率を下廻るやうにな

6) 此の點は、實はもつと嚴密なる論證を要する。それに就いては Kyoto University Economic Review の 1939 年一月號に發表せらるべき拙稿 On the General Profit-Rate に譲る。

り、資金が市場に流出して行くのであるが、資本主義が獨占段階に入つて一般利潤率が右の如く低落してしまふと、銀行が如何に貸付利率を低下しようとしても、銀行の行ひ得る程度の貸付利率低下を以つてしては、事業界の利益率を下廻る事は非常に困難になるのである。斯くして資本主義の獨占資本主義化に連れて生産物と資本との過剰が、即ち購買者を見出し得ざる生産物と投資口を見出し得ざる資金との堆積が、恒常的現象となり、不景氣の執拗性が頓に加はつて來る。のみならず、資本主義の獨占資本主義化は更に、後述する如く、一方では勞働運動を刺戟し普遍化し激化する傾向を有し、他方では生産力の發展を阻害し國際分業を切斷する傾向を有するものであるが、之等の事は、直接間接に企業の収益率を減殺し、投資衝動を毀損し、右に展開せられたる生産過剰乃至資本過剰の傾向を加重する。従つて銀行の通貨創造機能はそれだけ發揮し得られざる事になり、貨幣用金の名目的流通速度はそれだけ抑制される事になる。

然るに此の事は投資の伸張力喪失を意味するものであるが故に、失業——而も恒久性を有する——の激増を伴はずには置かない。のみならず、固定資本の増大——それは單に資本主義一般に共通なる生産力刺戟因に依つて生ぜしめられるのみならず、獨占資本主義段階に特に顯著なる勞働運動其の事に因る企業収益率減殺乃至企業安定性毀損や合理化運動に依つても促進される——はそれ自體、投下資本一定額當りの雇傭勞働者數を減少せしめずには置かないのであり、又、勞働運動に依る勞賃引上げ——それは往々にして主張されてゐるが如く大なるものではない——も、それに刺戟されて生ずる固定資本の増大の作用を離れても、資本一定額當りの雇傭勞働者數を減少せしめずには置かないのである。而も之等の失業誘發事情が、大戰中乃至大戰直後に異常に膨脹せしめら

7) 此の點に就いては、なほ、銀行論叢昭和十三年十一月號に於ける拙稿「金融機關の職能の變質」參照。

れたる世界的貨幣用金の名目的流通速度の其後の收縮過程の作用と複合したのである。その量に於いてもその持續性に於いても大戦前のそれと全然其の姿を異にしたる大戦後の失業は、斯くして生じたものである。

然るに右に考察されたる資本主義の動脈硬化の過程は、同時に經濟活動の政治化の過程でもある。

先づ失業の激増と恒久化とは、因となり果となつて勞働運動を刺戟し組織し尖鋭化する。勞働運動は斯くしてますます政治化する。而もそれが又因となり果となつて資本の自己擁護運動をますます多く政治化する。元來固定資本が増大し資本主義が獨占資本主義化するに連れて、産業の創業乃至繼續に就いて金融機關の協力の必要とされる程度が増加するのであるが、その事は同時に産業經營に對する金融機關の制覇の増加を伴はずには置かない。斯くして國民經濟の運営は次第に小數の大金融機關に依つて支配されるやうになるのであるが、斯くの如き小數の大金融機關はそれ自體小數の大資本家の支配の下にあるのが常である。資本は斯くして愈々組織されるのであり、それに従つて資本の自己擁護運動はますます多く政治化する。而もそれは又因となり果となつて勞働運動の政治化を促進する。

次に資本主義が動脈硬化症に悩んで來るに従つて、過剰生産物乃至過剰資本の捌口たる植民地の要望が愈々強くなり、それを支援する爲の國家活動が愈々期待されるやうになる。然るに植民地の確保乃至獲得の爲には、一方では植民地民自體の反抗——それは植民地自體の民族資本の發達と民族的自覺とに依つて強化される——と戦はねばならないし、他方では帝國主義諸國の妨害——それは植民地化され得べき餘地がなくなると頗る強化される——と戦はねばならない。従つて戦争の危機を孕んだ險惡なる事態が支配的となる。而も此の事は、國民の

關心を外に轉ずる事に依つて國內の社會不安を鎮壓せしめんとする一部の努力や、軍需の増加に依つてさもなくば過剰設備に依つて困窮するであらう重工業に毀盛を來さんとする一部の策動やに依つて、激化される。

大戰後の世界經濟の構造變化の基本的なるもの一つとして、私は右に於いて、資本主義の獨占資本主義化を擧げ、その作用を簡單に考察したのであるが、大戰後の世界經濟の構造變化の基本的なるものとしては、更にロシヤの革命が掲げられねばならぬ。世界の地域の六分の一、世界の人口の十分の一、を擁するロシヤに於ける革命の成功は、世界資本主義に重大なる龜裂を生ぜしめずには置かない。けだしそれはそれだけのものが世界資本主義の分業體系の中から切り去られたと言ふだけに止まらず、革命の成功其の事が既に各國の社會不安を刺戟するのみならず、ロシヤに根城を得たる共產主義の策を極めたる宣傳と策謀とは各國の社會不安を激化し、植民地の反抗を尖鋭化する。之等の事は、右に考察したる資本主義の獨占資本主義化に由來する資本主義没落過程の病的諸現象を愈々甚だしくせずには置かないのである。

併し大戰後——と言つても比較的最近——の世界經濟には、今一つの極めて基本的なる構造變化が生じてゐる。それは世界を擧げて澎湃として擡頭し來れる國家主義⁸⁾である。人はこれを經濟の政治化の今一つのものとして看做し得るであらうし、又、右に考察せられたる諸事情の一つの結果と考へ得るでもあらう。

資本主義が動脈硬化症に陥つて其の使命を果し得なくなるに連れ、右に考察したるが如き經濟的窮迫と社會的不安とが愈々嵩じ、國力を磨損せしめ國家の存立を危からしめるにすら至る。殊にロシヤに於いて勞働者農民が從來の國家に見限りをつけて反旗をひるがへし以つて彼等自身の國を戦ひ取つてからは、其の策を極めたる宣傳

8) 私は本稿では此の概念を愛國主義、國粹主義、國民主義、國民共同體主義、國民社會主義等をも含む極めて廣い意味に於いて用ゐる。

と策謀とに乗ぜられ易き動脈硬化症に陥れる資本主義を其の儘にして置く事は、愈々國家生活を不安に陥れる事になる。のみならず右に考察せられたるが如き世界經濟の基本的事情の下に於いては、それ自身の勢力圈内に充分なる國防産業の基礎——それは今日の戰爭技術からすれば相當廣大なる地域を前提する——を有せざる「持たざる國」は、それを有せる「持てる國」の指令下に置かれる危険に晒されるのである。従つて國家の生命の發展に強き關心を有する人は、國家的立場から資本主義を變革して内部の禍根を去り世界的戰爭時代に處して國を爲すに必要な國防産業の基礎を確保乃至獲得すべく、立ち上るのである。

と言つても、勿論、國家主義的運動がはじめから純眞に國家的立場に徹したる人士のみに依つて指導され促進されるとは限らないし、國家主義的政策が然らざる立場からの政策と常に背離するとも限らない。否、多くの場合に國家主義的政策は然らざる立場からの政策と符合するのであり、正に其の故にさうした政策を有利とする階級によつて國家主義運動が呼び起されるのである。市場の缺乏と社會不安とに惱める資本家が、植民地を獲得したり労働運動鎮壓の機會を作つたり國民の關心を外に向けたり軍需増加に依つて購買力缺乏の補ひを得たりする爲に國家主義運動を煽り、又、社會不安の緩和と購買力の増加とを得んが爲に社會政策を謳歌するが如き、又、生活不安に惱める労働者が社會政策の徹底と資本主義變革との爲に國家主義運動に走るが如きは即ち之である。従つて國家主義運動は往々にして偶々問題となる所の國家主義的政策を有利とする特殊の階級の利益の爲の運動以外の何物でもないかの如く考へられるのである。殊に、國家主義的政策が労働者の階級闘争を抑制し國防産業の基礎の確保乃至獲得を企圖し且過激なる破壊的變革を回避せんとするものである事は、凡そそれ等の政策を資

本擁護政策以外の何物でもないと看做し來つたマルクシストをして、國家主義運動の本質は資本主義擁護運動に他ならずとの見解を採るに至らしめてゐる。けれども、かりに國家主義運動が何等かの階級的利益の爲に利用すべく呼び出されたものであるとしても——實は必ずしもさうは言へないのであるが——、利用者が正にそれに呼び掛けねばならないほどの潜在的力を國家主義運動が既に持つてゐたと言ふ事、及び、一度呼び出されるや否や國家主義運動はそれ自身自覺を高め力を加へて、利用者自體をも批判するに至り得るものであると言ふ事、それは否定する事の出来ない事である。

斯くの如くして、資本主義が動脈硬化症に陥つて其の使命を果し得なくなるに連れて國家主義が世界を擧げて澎湃として擡頭して來たのであるが、併し、國家主義運動は何れの國に於いても同一の力を以つて發展するわけではない。其の國民性が元來國家主義的である國、後れて且其の指導の下に資本主義を採り入れたるものであるが故に其の國民が未だ充分に市民主義化し得てゐない國、其の内部に於いて資本主義的動脈硬化の症状甚だしく經濟的窮迫と社會的不安とがその根底を動搖せしめてゐる國、地理的乃至社會的關係上ロシアの赤化作用の危險に晒される事大なる國、富源乏しく乃至は偏して世界經濟の現段階に處して國をなす上に何としても國防産業の基礎の獲得を要する國、さうした國は然らざる國よりもヨリ強き國家主義運動を展開し得るわけである。

然るに斯くの如き國家主義運動は、曩に考察されたる資本主義擁護運動及び左翼的革命運動と複合し競合して現實の世界經濟を動かしてゐるのであつて、世界經濟は斯くして醸し出される渾沌状態を通じて、一步一步、新秩序——それは動脈硬化に陥れる資本主義を清算し國家意志に依つて統營される所の、且、生産力の現段階に照應

せる國防産業の基礎を其の内に保有するほどの地域を擁する所の、諸々の經濟ブロックに依つて、構成されるであらう——の建設に向つて進んでゐるやうに見える。支那事變は實に斯かる世界經濟の動向の一斷面であるのである。

三 支 那 事 變

日本資本主義が既に獨占段階に深入りしてゐる事、及び、資本主義的動脈硬化の諸々の症狀を既に露呈した事、それは蔽ふべくもない事實である。滿洲事變頃までの彼の深刻なる不景氣、殊に農村に於ける疲弊、打ち續く巨額の入超、滿洲の權益の動搖、而も斯うした事態を背景としロシヤの教唆に操られて燎原の火の如く廣がりし左翼運動とそれに因る社會不安の深刻化、滿洲事變後の彼の「からまわり」現象、凡そ之等の事を記憶する人は、日本資本主義の動脈硬化の事實を否定し得ないであらう。

然るに斯くの如き事態の推移は、ロンドン條約や政黨政治墮落や弗買問題やと絡んで、愈々國歩の艱難を深刻にする事となり、或は純眞なる或は然らざる意圖から次第に多くの國家主義運動が擡頭する事になつたのである。その國家主義も單なる國粹主義から次第に資本主義變革的なるものとなつたのである。殊に滿洲事變、上海事變、國際聯盟脱退、等々の一聯の重大諸問題の繼起は、やがて來るべき海軍條約滿期後の建艦競争の豫想と結んで、國家主義運動を刺戟し續けたのであり、茲に國家主義運動は愈々政治經濟的色彩を加へ、政治經濟の革新、強硬外交等所謂昭和維新の標幟を愈々眞剣に掲げるやうになり、且、極めて過激なるテロリズムの手段にす

ら訴へるに至つたのである。血盟團事件（昭和七年二月九日元藏相井上準之助氏、同三月五日三井合名理事長男爵園塚慶氏狙撃となつて現はれた）、五・一五事件（昭和七年五月十五日首相官邸、内大臣邸、政友會本部、警視廳、日本銀行、三菱銀行及び東京市外の數ヶ所の變電所の襲撃、犬養首相以下數名の殺傷となつて現はれし）、神兵隊事件（昭和八年七月十一日、内閣總理大臣官邸に爆彈投下、内閣總理大臣官邸、警視廳、内大臣官邸等々の襲撃放火、齋藤首相以下各國務大臣、内大臣等々の殺害、等々を決行せんとして事前に抑へられし）、二・二六事件（昭和十一年二月二十六日内閣總理大臣官邸、内大臣私邸、教育總監邸、前内大臣宿舎、侍從長官邸、大藏大臣私邸の襲撃、齋藤内大臣、高橋大藏大臣、渡邊教育總監の殺害、等々となつて現はれし）、等々は即ちこれである。

然るに打續くテロリズムは國民大衆を國家主義諸團體から却つて離反せしめ、又、滿洲事變以後にはじまる軍需・輸出景氣は、資本の制覇力を盛り返さしめたのであり、斯くして次第に、殊に二・二六事件以後は、國家主義運動の或る程度の退歩が見えてゐたのである。第六十九議會に於ける齋藤隆夫氏の演説とそのの言論界に於ける反響、日獨防共協定成立に對する有力階級並びに言論界の反對、第七十議會に於ける濱田國松氏等の追及とそれの言論界に於ける反響、第廿回總選舉の成績、等々にも我々は之を視ひ得るであらう。實に斯かる情勢の下に支那事變は起つたのである。

支那事變は、世界經濟の現段階に處して行く爲に日本の國家主義の立場からも又資本主義の立場からも切實に要望される所の「日支の提携」が、主として英・露の教唆に操られて抗日の旗の下に民族的團結を固めて來た國民政府に依つて斷然拒否せられたと言ふ事の故に、所詮何時かは何等かの姿に於いて起るべかりしものである。

併し日本は、國防計畫が未完成であつた事と、寧ろ支那の背後に在る者を突く方が所企の目的をヨリよく達し得るであらうと言ふ事の故に、支那事變が斯かる姿で發生し擴大する事を、少くとも當初の間は、寧ろ不本意としたのである。だからこそ昭和十二年七月七日彼の蘆溝橋事件が發生してから後しばらくの間は、日本は不擴大主義局地解決主義を堅持したのであり、事變の上海への飛火に照應して同年八月十五日南京政府斷乎膺懲の重大聲明を發して後もなほ、穩便解決に對する未練を容易に清算し得なかつたのである。にもかゝらず事變が斯く擴大する事になつたのは、抗日教育の徹底と英・露を主とする諸外國の對支教唆・支援とがあつたからである。

支那事變は斯くして、恐らくは多くの人々の夢想だもしなかつたであらう程度に擴大してしまつたのであり、日本の國を賭しての大事業となつてしまつたのである。實に斯かる大事業が斯かる仕方ですかる程度に遂行されて來得たと言ふ事は、驚嘆に値する事であつて、國民大衆の間に國民的自覺を喚起し其の國民的自覺に依つて支持されると言ふ事に依つてゝなしには、所詮實現し得られなかつたであらう。

元來我が國民は町人的に非ざる生活に實に永い間慣れ來つてゐるのであり、其の下に培はれ來つた特殊の情操は國民心理の根底に深く厚く沈澱され堆積されてゐるのであり、此の情操は「天皇を家長とする家族國家」への根強く暖かき信念に其の焦點を見出してゐるのである。而も此の國民的情操は、我が國民經濟が後れて且國家の指導の下に資本主義化したるものであり、且、其の資本主義化の努力と相並んで「特殊の國體」に就いての信念を愛育すべく色々な努力がなされ來つた——高等の學校へ進むほど此の事は多くの場合事實上忽にされたが——ものであるから、中々町人的なるものになり切り得ないのである。（勿論斯うした國民情操は國民全部に同一の程度に

存するわけではない。個々の國民は其の生活環境其他に従つて、色々に異つた國民情操を持つてゐるであらう。殊に金錢取引の荒波に全生命を託して其の日其の夜を過ごせる人々乃至は町人的自由主義的民主主義的舶來思想の研究に没頭し來つたインテリゲンチヤの中には、日本國民的情操の頗る稀薄となつた者があるであらう。併し、一本一本の樹は如何にあらうとも一體としての森は特殊の性格を有するが如く、國民の部分部分は如何にあらうとも一體としての國民は特殊の性格を有するのであり、特殊の國民的情操を有するが如く動くのである。實に此の日本國民的情操こそは、時局の進展と共に國民的自覺が國民の間に澎湃として起つて國家的事業の遂行を支持するやうになり得た基礎である。併し又此の特殊の國民的情操こそは、時局の推移に關するそこはかとなき數々の豫想を水泡に歸せしめたものでもあるのである。

元來人は己れを以つて他を推すものである。一體としての日本國民よりも遙かに町人的自由主義的民主主義的意識を持つた歐米人にとつては、時局の進展と共に斯くの如き國民的自覺が日本國民大衆の間に起り斯くも大なる犠牲にも挫む事なく此の大事業の遂行を支持し続けやうとは、どうしても考へられなかつた。だからこそ彼等は支那を支援して抗日を續行せしめればやがては日本の經濟力が破綻を來し又日本の内部に社會動搖が勃發して必ずや日本の屈服する日が來るであらう、と考へたのである、此の事は事變發生當初の歐米の新聞雜誌の論調に歴然たるものがあり、又、當時彼の地に在つて私自身外人の口から直接屢々聞かされた所である。實に斯くの如き見通しの下に、ロシヤは、日本の軍擴計畫の完成せざる間に此の方面から日本の虚を突かう、と考へて支那を教唆したでもあらう——中國共產黨と蘇聯との關係、殊に西安事件は此の事を暗示するし、又、此の事變の當初に不擴大現地解決の報を入れる毎に例へばロンドン・タイムス、デリー・テレグラフ等の有名なる諸新聞がすべてそれを信じたる論説を掲げてゐたのに、共產黨の機關紙たるデリー・ウアーカーが大事變に展開して行く事を終

始一貫して主張したと言ふ事も、何等か此の間の事情を物語るかも知れない——し、英國は、日本が斯くして愈々窮地に陥入つた時に日本を口説いて嘗ての「東洋の番犬」に立戻らせよう、と考へて支那を支援しつゝ、機を狙つてゐるでもあらう——此の事は、南京が陥ちても、徐州が落ちても、廣東・漢口が日本軍に占領されても、執拗に援蔣を續くる英國の政策によつて如實に物語られてゐるし、又、事變この方變らざる英國の有力新聞雜誌の論調や議會に於ける問答からも覗はれるのである。

乍併、一體としての日本國民よりも遙かに町人的自由主義的民主主義的意識を持ち其の意識から日本國民の動向を推す事に依つて誤算に陥入つた者は、果して歐米人のみであつたらうか。如何に國民的自覺を矢筈しく言つて見たところでこれほどの犠牲を國民大衆が黙つて忍ぶ筈はない、やがては日本の經濟力の破綻が到來し又日本内部から反旗が翻へる筈である。而も其の時期も今度こそは愈々近づいた、と言ふやうな事を、筆舌にこそ公然と出さないとしても、多くの社會科學徒は考へ考へして來たものではなかつたらうか。多くの社會科學徒の豫測が斯く事毎に外れて來たのは、彼等が一體としての日本國民の性格を了解すべく餘りに自由主義的民主主義的思想に感染し過ぎて宙に浮いてしまつてゐたからではなからうか。

支那事變は國民的自覺を非常な程度に廣め深め高めたのであり、國家主義運動の不行進にうつり得べき方向に國民大衆を準備したのである。此の國民大衆の準備こそは日本の國家主義運動の進展の爲に新に展開せられたる基礎地盤であり、此の國民大衆的基礎地盤に根を下しそれを組織しそれから盛り上つて來直すことに依つてこそはじめて日本の國家主義運動は其の所企の目的を達し得るに至るであらう。併しながら其の國民大衆的基礎地盤

に根を下しそれを組織しそれから盛り上つて來直す爲には、國家主義運動自體が從來往々にして持つてゐた所の不純なる要素を清算して掛らねばならないし又從來のやうな拙劣なる組織力から斷然抜け出して來なければならぬのであるが、殊に、これから相當の期間にわたつて對內的にも對外的にも愈々難路にさしかゝるであらう所の新東亞建設の大業に眞に國を擧げて當るのに適したやうな經濟體制を、即ち、資本家の打算に妨げられて所要の生産擴充が出來なかつたり國民負擔の不公平の爲に社會的不安が生じたりする事の無いやうな經濟體制を、斷乎として採るだけの智と勇とを持つて來なければならぬ。其の事の實現される日からこそ、我々ははじめて、眞の意味に於いて、「悠遠の神代より轟く歩調うけつぎて大行進の往く」を見得るであらう。

併しながら若し日本の國家主義運動が此の際斯くの如き自己止揚をなし得ないとするならば、即ち、從來往々にして持つてゐた所の不純なる要素を清算し得ずして國民大衆の信賴を贏ち得ず、又、舊態依然たる排他獨善主義と大衆輕視態度とから抜け得ずして内部的團結と大衆的接觸とを缺き、殊に又、資本家の打算に妨げられて所要の生産擴充が出來なかつたり國民負擔の不公平の爲に社會不安が生じたりするやらの經濟體制に斷乎として手をつけるだけの智と勇とを持たずして國民大衆の離反を招くが如き事があるとすれば、誠に憂ふべき事態が発生しないとは保し難い。けだし、廣東・漢口の陥落に依つて、國民の關心は戰爭から政治・經濟へ移された。従つて、一方では負擔の公平の問題がこれまでよりもつと本格的に採り上げられやうとしてゐる。それは戦地からの歸還兵が次第に數を加へるに従つて、其の眞剣さを増すのである。而して其の點をつけ込んで何等かの事をなすべく、左翼の策動は漸く辛辣を極め出すであらう。而も他方では、事變に依つて享受し得てゐた特殊の利

益が此の際取り去られる事がないやうに、事變の故に甘受してゐた制約が今後固定され乃至は更に強化されたりする事のないやうに、若し出来るならば此の際斷然前進して事變の實をわたくし出来るやうに、一部の畫策は愈々強く行はれやうとしてゐる。これ等の事情はそれ自身に於いて既に、此際國家主義運動の成功せざる場合に於ける國歩の艱難を、想像せしめて餘りあるものである。然るに、やがては日本の經濟力が破綻を來し又日本の内部に社會動搖が勃發して必ずや日本の屈服する日が來るであらう、と考へて支那を支援して抗日を續行せしめて來た諸國は、愈々其の機會の到來が近づいたと考へて、色々の妨害や壓迫や誘惑や策謀やを甚だしく加へ出すであらう。従つて、若し日本の國家主義運動が此の際曩に規定したる如き自己止揚をなし得ないとするならば、實に由々しき事態に立ち至らないとは保し難いのである。……と言つても勿論左翼の人々が或は期待してゐるかも知れないやうな結果には決して立ち到らないであらうが。

日本の國家主義運動が實を結んで國民的大行進が眞の意味に於いてはじまるか、それともそれが不幸にして成らずして由々しき混亂に陥るか、支那事變はさうしたキワドイ所に我々を押しやつたやうに考へられるのである。支那事變は斯くして日本資本主義没落の過程を、従つて世界資本主義の没落の過程を、驚くべき程度に促進したのである。

(二五九八・一二・五)